

講

錄

全

一

013995-000-0

特17-441

講錄

金光 大陣/著

M27

ABB-0247



講題

神國の人よ生れて神と皇上との大恩を知らぬ事

唯今奉讀致ましたは何れも御承知之通り吾教祖の

神誠第一條であります右一條を講題として聊御取

扱する積であるさて神國の人に生れて神と皇上と

の大恩を示されましたハ斯大日本と云ふ國は神様

の御國である夫れハ如何いふわけかと以へば此御

國を始めと志て世界を御容造遊されたる其高き尊



き神々様が此御國を神の宮所と御定まゝして八百萬
 の諸神等共々御國に御鎮りあそばされまゝして然
 て吾々人間は皆其神々様の子孫であるといふ義な
 り又皇上とは一天萬乗よ渡らせ給ふ天皇陛下の御
 事で在る吾國の天皇陛下は諸外國の大統領や國王
 などとは天と地の相違があります夫は天地開闢の
 時より大義明分といふことが定つてありまゝして吾
 豊葦原瑞穂の國則ち大日本帝國ハ天照大御神の神

孫の君たる可き國にして天壤無究万世一系の天皇
 は御坐しまゝして大君は民を親臨給ふこと眞の赤子
 の如く民ハ大君を仰ぐこと眞の親代如くよゝて早
 く云へば天皇陛下ハ日本國人民の大父母様よゝて
 吾々人民ハ眞の臣や子である此親子の神縁により
 て幾千年の昔の吾々先祖より迄て今明治の吾々に
 至るまで御大恩を蒙りつゝ御互の身に及で來て居
 るわけであるうこで此神恩此皇恩ハ人といふもの

へは吾國よりも數多の人民が行て住居して商業を營み居ります故に其人民御保護の爲めに去る六月來

畏も 天皇陛下の大命の隨々吾陸海軍の軍人は彼國へ日に夜を繼で派遣致されました定めて聽衆の中よりは其子や兄弟等が行て居らるる方々もありまゝようが遂に此頃の新聞よて見受ます皆御承知もあらん早朝鮮國の豊島といふ島の近傍に於て清

國軍艦より吾日本の軍艦へ向て發炮せしかば吾軍艦は直ちよ是れよ應じて戰ひまゝした然るところ愉なるかな快なるかな忠愛一片よ堅め立たる鉄石の如き大和魂を籠めたる吾日本帝國兵士は第一着早々より大勝利を得たる由であります此上は如何あり行くかは今より豫め知る譯には参りませぬと雖も抑々吾國が外國に對しては昔より一寸だに敗を取たる事のなきは皆御承知もあらん昔く神功皇后

八
様か神軍を起して三韓(今の朝鮮)を征伐あそばされ
亦た加藤清正公が彼國を討ち平げ亦弘安四年の頃
蒙古と云健き國より吾九州沖に數万の大船を寄せ
來て數百萬の兵隊を以て日本を一夜の間に併吞せ
んとせし事もありしが當時には一夜の間に神風吹
起りて彼賊兵を皆殺にし生て歸る者僅に三人とや
云ふ亦近くハ明治七年四月に彼の臺灣といふ世俗
鬼國とも云ふ所の荒き賊徒を吾軍人は一戦の下に

討平げたる事の例もあり況や今回の勢に於ては決
して彼の國々に一寸だに敗を取る様の氣遣は万々
ふいと信しますいでや四千万の同胞兄弟ハ男とな
く女となく擧て神國の軍人たるの氣象を奮起せね
ばならぬ今此時機が神國の神孫たる大日本帝國の
國權と大和丈夫の武威とを海外に輝かすの愈々
大時機で在る此精神此壯快ある決心を以て吾々同
胞たる軍人諸氏ハ一天萬乘の大命を奉じ余念なく

此日本國よ親や妻子を残り置きて彼の三韓の地理も不案内なる國へ渡り往きて唯君の御爲國の御爲と吾々が國と家とを代りて野よ山よ海よと陣取りをあつて心をも身をも擧て大日本神國の光りを輝かさんと日夜寢食を忘れて盡せる吾同胞たる武士が其心の程を想像り酌取らねばありませぬ事である爰よ言代葉よ擧ぐるも恐おがら吾 天皇陛下より在韓兵士へ度々慰問として御惠の御物を下り

賜事ハ皆々已に新聞よ且ハ傳聞よ何れも御了知からん實よ 陛下の吾軍人を愛せられ惠せらるる此 聖恩の高きよ浴する軍人等ハ彼の國よありて如何よ難有思ひしならん亦遙よ洩れ承れば朝鮮事變よ係る電報ハ如何よ深夜たりとも一々御覽せらるるとかや聞きぬ斯くも大御心を煩らはせらるると承るも恐多き事で在る實よ吾教祖の遺訓よ吾身ハ吾身からず皆神と君とのものも乃と思へよと教遺と

此其實を愈々行ふ機ハ斯時代事あらんか嗚呼滿
 場の聴衆の各方よ如斯説き去り如斯教へ來れば如
 何なる憾慨を抱かれしや如何なる思を惹起されし
 や實よ斯機よ當ては平素ハ或政黨の主義の變るよ
 り互よ相争ひ或ハ己が奉る所の信仰の道の異なるよ
 り忘て席を相同ふせざる人々も今日ハ私心を去り
 公義をとり唯萬世一系の 大君と日本神國より外よ心
 を留す唯た忠と愛とより外に思ふ心なく忘て同心

協力を以て此の大地も裂け鉄も湧くといふ此炎天の眞
 中に彼の國に於て銃を採り劍を振り居る吾人同胞
 の軍人諸氏が爲には斯國に居残り留まれる吾々は
 互に心盡して在韓軍人ハ艱難の万分の一だに慰め
 問はんことを圖ではかりますまい各々如何御考な
 ざるや而して人の力の及ばぬ人の心の届かぬ處を
 ば眞心こめて天地神明へ祈願申上げねばなりません
 夫故に吾本部よりは已に吾々の所へ在韓軍人の

身体健康の祈願を一生を籠めて執行せよと達せられまゝした元より御達なくとも事變起りし以來は日夜祈願しつゝありしが爾來彌々心の限り祈念致居次第で在ります扱て已に彼國へ出陣して居る兵士の家の内に残れる家族老幼の内には今回出陣して在る其人の爲めに日々をしのぎ居りし人もありしあらん是等の人々を保護致度きもので在る尤も是等は其筋より何とか出來うるものでありまゝよ

うが其筋の御沙汰を待すとも心に懸て世話せねばあらぬ事であることゝに一步を轉じて特に注意致置度事かあります目下我國に居留する支那人に對するに決して粗暴の仕打をしてはありませぬ今我國に居留する支那人に怨あることではありませぬ然れども稍もすれば坊主が憎ければ加裝まで惡と云ふことがありますが決して左様な小人輩の心を持つてはなりませぬ此際ハ一會彼等には心を用ゆる方日

本帝國の特性たる道徳を彼等ニ知らせる時で在る
 と考ます併ウマレンキながら此注意ハ此席へお出いる様な各
 々方への無用の言ふれども本職が老婆心らふであるか
 ら其心してよ（此特別注意ハ山間ノ地方ニシテ支那
 人居留セザル地方への無用ノ言也）
 扱まはて終りに臨んで一言念の爲申置度ハ目下時も炎えん
 暑しよにして吾國の内にも所々に流行病もある由なれ
 ば互に衛生を守り接生せつせいを重んじ厚く信心して身体
 を堅固けんこにして内を堅く守りつゝ流行症いやぢなどに御互

に罹からぬ様にして陸海軍々人一同凱戦歌擧かちいくさのこゑあげて勇いさま
 く一日も早く歸國せらるゝの時を西天せいてんを仰あふいで待受まち
 け度たき事であります

附言 此講録ハ日夜繁忙ノ折柄ニリ急ヤ筆記セシモノニシテ前後複雑且
 誤植等モ多カラシ共邊ハ講師諸氏共席ニ臨テ宜敷ニ隨テ取捨應用セラレン
 コトヲ
 編者 白ス

丁

明治廿七年七月廿九日印刷
全 年八月二日出版

非賣品

神道金光教會長

著述者 中教正 金光 大陣

岡山縣備中國淺口郡吉備村
大字大谷七拾三番邸住

神道金光教會專掌

發行者 權少教正 佐藤 範雄

廣島縣備后國安那郡御野村
大字上御領四番邸

印刷者 西尾 大吉

岡山市大字平野町廿四番邸